2023 年 12 月 25 日放送

「第 122 回　日本皮膚科学会総会　⑬
教育講演３６－２　クリニックで自費診療に挑戦する」

新宿南口皮膚科
院長　乃木田　俊辰

はじめに

本日は「クリニックで自費診療に挑戦する」というテーマでお話しいたします。

お話の前に、私の皮膚科医としてのバックグラウンドを紹介します。1979 年から 1997 年の 18 年間、熊本大学、東京大学、東京女子医科大学で皮膚科医として勤務、1998 年から開業医としてスタートし、この時から美容皮膚科医療として約 25 年間、自費診療に取り組んできました。今回は、美容皮膚科医療の歴史、立ち位置、そしてクリニックでの治療内容について解説します。

宮地良樹、古江増隆、松永佳代子編(2003 年)『皮膚科医がはじめる cosmetic dermatology』の序文に以下の文章が記載されています。「皮膚科診療をめぐる閉塞感のなかで、いま cosmetic dermatology が新たな潮流として注目されている。その背景としては、いままでとかく胡散臭かった美容皮膚科学にもサイエンスのメスが入り、皮膚科専門医の誰もが納得できる理論と実践が展開され、有用性の検証が行われつつあること、従来の皮膚診療を越えて、審美的皮膚診療への社会のニーズが高まってきたことなどがあげられる。」

美容皮膚科の歴史

美容皮膚科の歴史は、1959 年日本皮膚科学会総会で元東京女子医科大学皮膚科教授の中村敏郎先生が会頭講演で「美容」という言葉を用いて、はじめて美容が皮膚科学会の中で認識されました。しかし当時美容は、２流３流のイメージでした。1980 年代にエステティックが誕生。1987 年「日本美容皮膚科研究会」が、元日本皮膚科学会理事長、安田利顕先生により創設され、1994 年日本美容皮膚科学会へ発展しました。会員数は、2001 年 509

名、2008 年 1,690 名、2022 年 3,096 名と順調に増加しています。第 28 回日本美容皮膚科学会総会で会頭の東京女子医科大学皮膚科名誉教授、川島眞先生は、美容医療に対する社会的ニーズの急速な高まりに伴い、日本美容皮膚科学会もまた急速な成長を示し、その会員数は 1,600 名に達するまでになっております。すなわち、美容皮膚科学は皮膚科学の 1 分野として、その地位を確立したと言えます。よって、本学会の重要性もまた一段と高くなり、美容皮膚科診療技術の向上のための教育、美容医療の新規施術・機器の紹介・評価結果の報告、患者さんの QOL の評価、さらにはコメディカルの育成も包括した総合的な美容医療の発展を目指すものでなければなりませんと述べています。

美容皮膚科の歴史

1959年　皮膚科学会総会で、元東京女子医大教授
中村敏郎先生の会頭講演で「美容」がはじめて
認識された。（当時は、二流三流の医者の印象）
1980年代　エステティックの誕生
1987年　「日本美容皮膚科研究会」の発足
元東邦大学教授、
元日本皮膚科学会理事長　安田利顕先生が創設
1994年　「日本美容皮膚科学会」へ発展

美容皮膚科・レーザー指導専門医制度の発足

さてそこで、では美容皮膚科医療は誰がするのかということです。実際、現実的に実施しているのは、婦人科医、麻酔科医、内科医、眼科医、歯科医などの一般医師、形成外科医、皮膚科医、皮膚科専門医、美容皮膚科レーザー指導専門医と様々な専門分野、資格の医師であります。勿論、医師の資格があれば、誰でも可能な分野です。本来は、皮膚科の基礎知識、皮膚疾患の治療経験を積んだ医師が、治療の延長線上に美容医療を生かすべきと考えます。

2007 年、日本皮膚科学会は美容皮膚科・レーザー指導専門医制度を発足させました。目的として、美容皮膚科・レーザー治療に関する優れた診療技術と知識を有する医師を育成し、これによって美容・レーザーの診療水準を向上させ、国民の医療と福祉に貢献することと記されています。この制度は、皮膚科専門医を取らないととれない２階建ての構造になっているので、十分に研修されてスキルをいかしていくための指導専門医という位置づけになっています。具体的には、日本皮膚科学会認定皮膚科専門医を取得した後に、さらに美容皮膚科・レーザー療法の診療の臨床経験を積み、所定の申請資格を満たし、筆記、口述の認定試験に合格して認定されます。

美容皮膚科・レーザー指導専門医

【目的】
日本皮膚科学会認定指導専門医制度規則に基づき，美容皮膚科・レーザー治療に関する優れた診療技術と知識を有する医師を育成し，これによって美容・レーザーの診療水準を向上させ，国民の医療と福祉に貢献することを目的とする

日本皮膚科学会認定美容皮膚科・レーザー指導専門医制度規則（平成 21 年 4 月 23 日改正）

2007年に皮膚悪性腫瘍指導専門医と同時に発足した。

・皮膚科専門医取得後に、皮膚科医が目指す専門領域の一つである、「美容皮膚科・レーザー治療」の指導専門医。
・皮膚科専門医を取らないとなれない2階建ての構造になっているので、十分に研修されてスキルを活かしていくための指導専門医という位置付けである。

私が大学病院を退職し、クリニックで美容皮膚科診療をスタートする、ちょうどそのタイミングにこの制度が発足したので、私も勇んで資格取得に挑戦しました。しかし、申請資格条件が厳しく、指定されたレーザー装置での治療実績をつくるため、受験まで 2 年間浪人し、ようやく、2010 年 1 月 24 日、第 3 回の認定試験で受験、受験者は私 1 名で、合格しました。2019 年で、日本皮膚科学会会員数は 12,500 名、日本皮膚科学会認定皮膚科専門医は 6,820 名、2023 年、日本美容皮膚科学会会員数は 3,096 名、2022 年、美容皮膚科レーザー指導専門医は 52 名で非常に少ないです。

クリニックでの治療内容

1997 年頃より、日本にケミカルピーリングとレーザー脱毛の画期的美容医療技術が導入されました。まさに、この時大学の勤務医を退職した時であり、運に恵まれたと感じています。ケミカルピーリングは、ピーリング剤を用い角層剥離作用で皮膚のターンオーバーを早め、ニキビの治療改善、老化によるくすみ、小じわの改善を可能にする医療美顔術の基礎となります。私は以前より、ニキビ治療の患者満足度の限界を感じていたので、画期的な技術ですぐにとびつきました。2008 年にアダパレン、その後、過酸化ベンゾイル製剤が次々と発売され、ニキビ治療の革命ともいうべき面皰改善が可能となり、以前より、ケミカルピーリングの存在意義が薄れてきましたが、まだまだ、一般診療では、様々なニキビ、ニキビ痕を綺麗に治すことが困難な場合が少なからずあり、いまでも、ニキビ治療には必要な方法であると考えています。また、1450nm のダイオードレーザーで、ニキビの炎症後に生じる炎症後丘疹を治療、さらに、皮膚の吸引とブロードバンドの光照射を同時にするアイソレイズを用いて、皮脂の排出、排膿、抗炎症作用で難治性ざ瘡の治療にあたっています。陥凹性瘢痕に対してはダーマペンを用いて治療を行っています。

取り入れてきた主な美容皮膚科的治療方法

- **1　レーザー治療　（色素性病変、血管性病変）**
- **2　レーザー脱毛**
- **3　ケミカルピーリング・イオン導入**
- **4　スムースビーム**
- **5　アイソレイズ**
- **6　ダーマペン**
- **7　ヒアルロン酸注入**

レーザー脱毛は、従来の電気針脱毛にとってかわる方法で、米国ハーバード大学の Anderson らが選択的光加熱理論に基づき、メラニンを吸収体として毛包に照射し、バルジ領域の幹細胞、毛包下部の毛球部、皮脂腺開口部を破壊し、表皮には影響を及ぼさないレーザー脱毛を開発しました。永久減毛という新たな定義も先の研究グループから提案され、医療側の永久脱毛の考え方の基礎となりました。GentleLASE を長年使用して、安

私の使用したレーザー装置の変遷

1990　Qスイッチアレキサンドライト（キャンデラ：PLTL-1）
1997　ロングパルスアレキサンドライト（サイノシュア）
1998　ロングパルスダイオード（ルミナス）
　　ロングパルスNd:YAG（SLTジャパン）
1999　ロングパルスアレキサンドライト（GentleLASE）
2001　IPL（クリアタッチ），炭酸ガス，QスイッチNd:YAG
2005　ダイオード（キャンデラ：Smoothbeam）
2008　IPL（アイソレーズ）
2008　Qスイッチアレキサンドライト（キャンデラ：Alexlazr）
　　ロングパルスダイ（キャンデラ： Vbeam）
2011　フラクショナル（ソルタ：Clear&Brilliant）

全で効果的な医療脱毛を行ってきました。シミ治療では、Q スイッチアレキサンドライトレーザーを用いてきました。

おわりに

最後に、再度 cosmetic dermatology の序文の一文を紹介し、私の解説を終えさせて頂きます。

「cosmetic dermatology はあくまでも皮膚科専門医を取得した医師が、1 つのサブスペシャリティとして行うべきものである。卒業したての非専門医がにわかに cosmetic dermatology に手を染めるべきではない。cosmetic dermatology には皮膚科学の基礎も臨床も必要であり、正しい診断や問題が発生した時の正しい対処法など、皮膚科学全般の臨床能力が問われるからである。いわば皮膚科専門医制度の 2 階建て部分に相当するスキルなのである。」

以上、ご清聴有難うございました。

「マルホ皮膚科セミナー」

https://www.radionikkei.jp/maruho_hifuka/